

# 定型業務の終焉と 「ビルダー」への進化

生成AI・AIエージェント時代における  
特許事務所・弁理士の生存戦略

# The Burning Platform: 島津製作所が証明した「AI主導 (AI Main)」の現実

Cost & Time

## 1億2,000万円+

年間外部委託費の削減  
(目標比150%達成)



知財部員工数削減

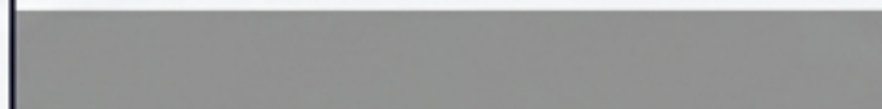
Business Impact



事業部のFTO(他社特許調査)  
関連工数の圧倒的圧縮

The Time Collapse

Before: 数か月



After: 数分

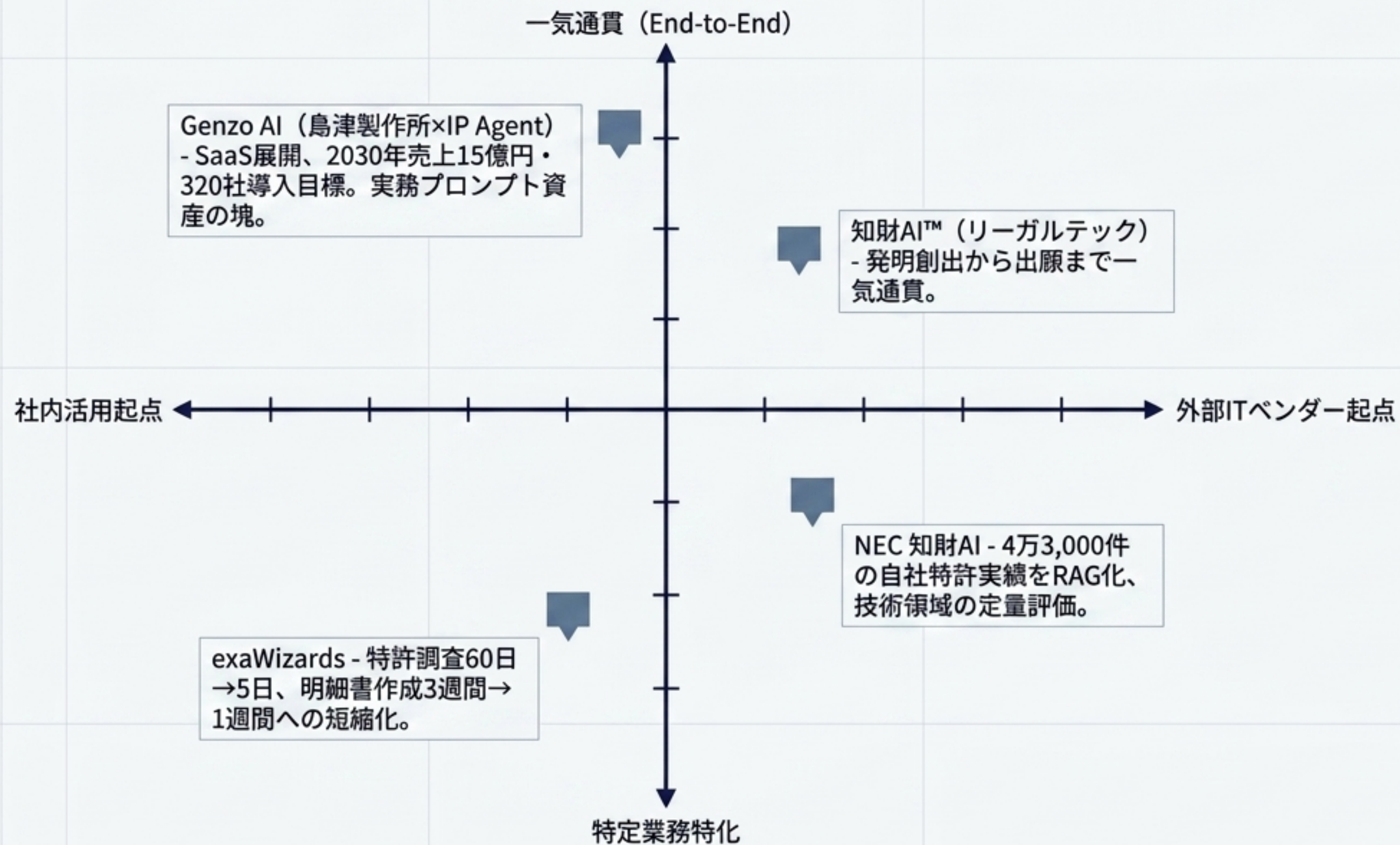


外国OA(拒絶理由)対応の  
アナリシス時間

「人だけが対応する特許の仕事がなくなった」— 権利化・FTO・発明届出処理は既にAI主導へ移行完了。

# 2025-2026 知財AIエコシステム・マップ：侵食される実務領域

米国法務部門のAI活用率：1年間で23%→52%へ倍増（外部事務所の透明性要求が急増中）。



# 代替不能性の境界線：「80点」のコモディティ化

意思決定と責任の担保：  
不可逆的リスクを  
背負う「覚悟」

トップクオリティへの昇華：  
権利範囲の精緻化、  
進歩性の論理構築

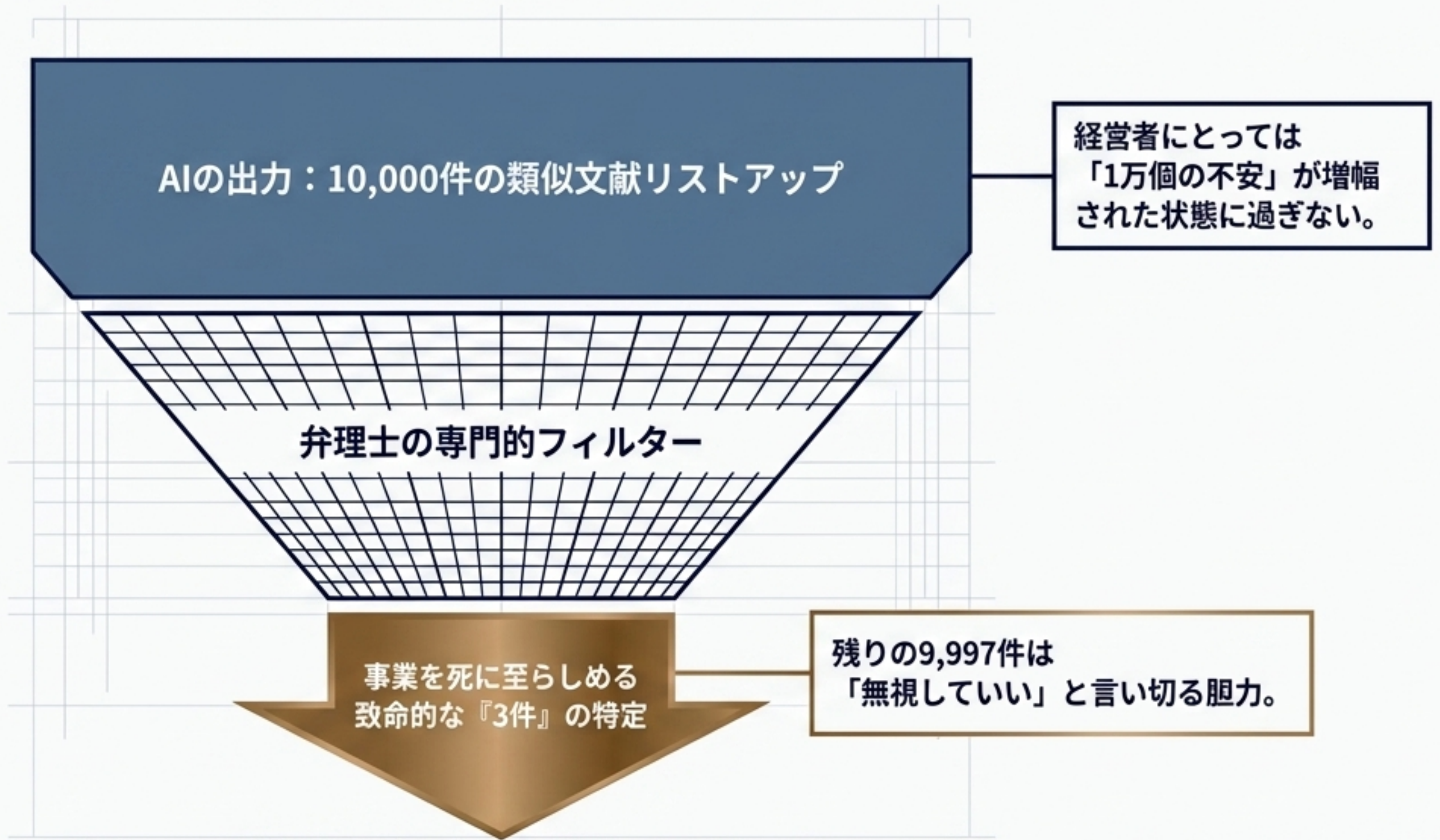
一次情報の獲得：  
開発現場のリアルな事情、  
人脈からの暗黙知

The AI Baseline (80-90点のクオリティ)

- 先行文献調査 (60~80%短縮)
- 明細書初期ドラフト生成
- 外国OA初期分析
- 特許翻訳 (内製化による外注費削減)
- 期限管理・書類整理

AIは「正しい出力」を出せても、  
損害賠償などの「責任」を取る  
ことはできない。

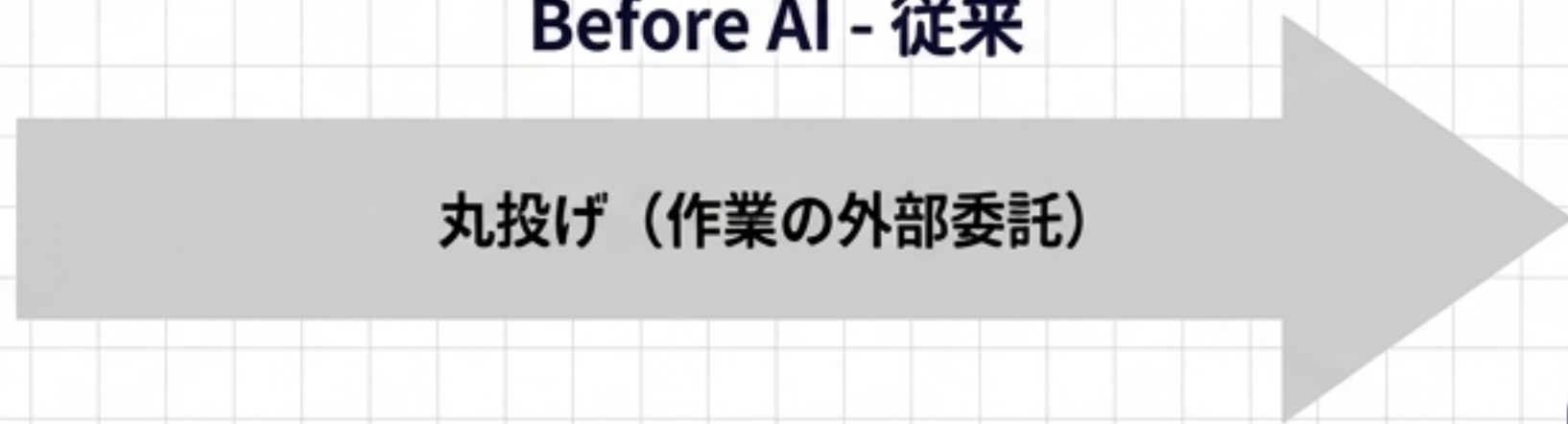
# The 10,000 to 3 Principle : 経営層が真に求めるコンサルティング機能



AIが予測を出し、専門家がそれを「決断」に変える。知財戦略を事業戦略と連動させ、経営者がアクセルを踏める状態を作り出すことこそが非代替の価値。

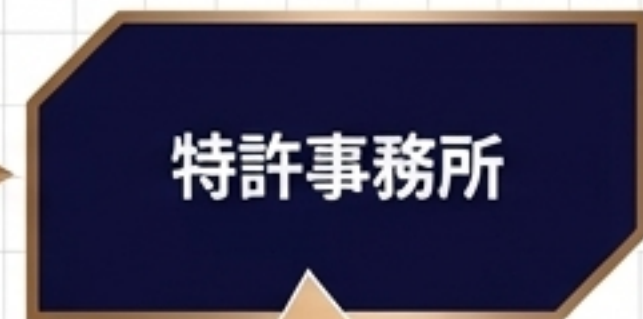
# 分業構造の反転：下請けからの脱却とトップクオリティへの特化

Before AI - 従来



発明抽出、先行調査、  
ドラフターから作成、翻訳全量

After AI - AI時代



ベースをトップクオリティへ引き上げ、  
図面・各国特有のクレーム調整、  
重要案件の高度コンサルティング

企業側のAIツールやプロンプトを事務所と共有し、同じ出力結果をベースに検討する「新・連携形態」の誕生。

# The AI Divide : 市場価値の残酷な分岐点

1人当たり特許出願件数：74.5件(2003)  
→ 24.7件(2022) / 売上低下の構造的圧力

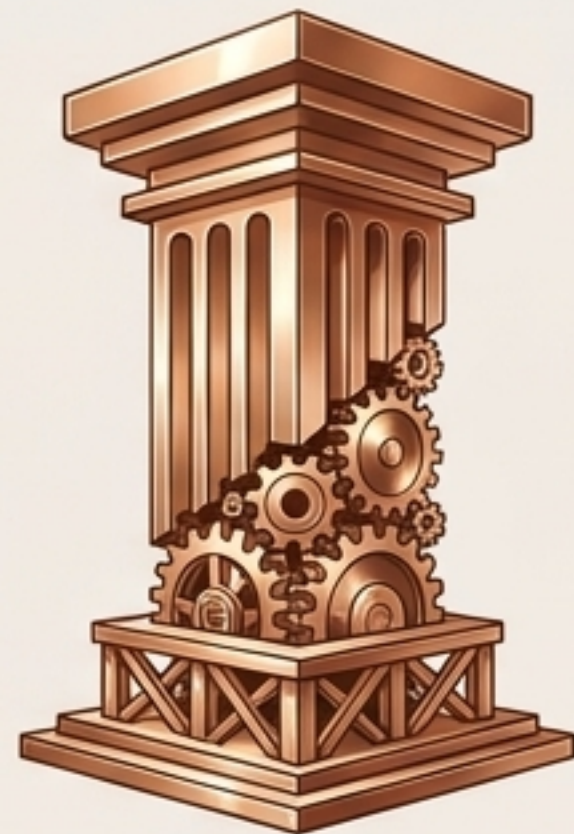
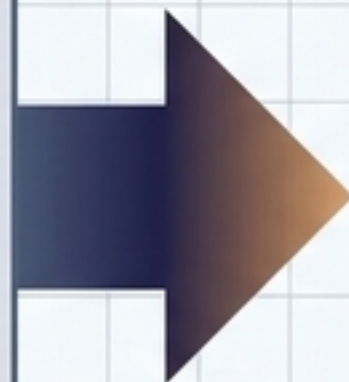
	【AIを使いこなす弁理士】	【AIを使えない弁理士】
スピード	企業の圧倒的なスピード感に同調	「1か月かかります」と従来のテンポ
依頼案件	AI単独で対応不可な「重要案件」を独占	定型業務が企業内AIに奪われ依頼減
クオリティ	AIの上限（80点）を超えるトップレベル	「そこそこの水準」にとどまり差別化不可
到達地点	戦略的パートナー（高付加価値）	手続代行者（価格競争・コモディティ化）

# パラダイムシフト：「時間売り」から「価値売り（ビルダー）」へ



**Time-based Billing（手続きの代行者）**

文献を読み、分析し、文章を作成する「作業時間」に対する対価。この根底が揺らぐ。



**Value-based Billing（経営判断のビルダー）**

経営判断の根拠をゼロから構築し、予測を「決断」に変える判断のラストワンマイルに対する対価。

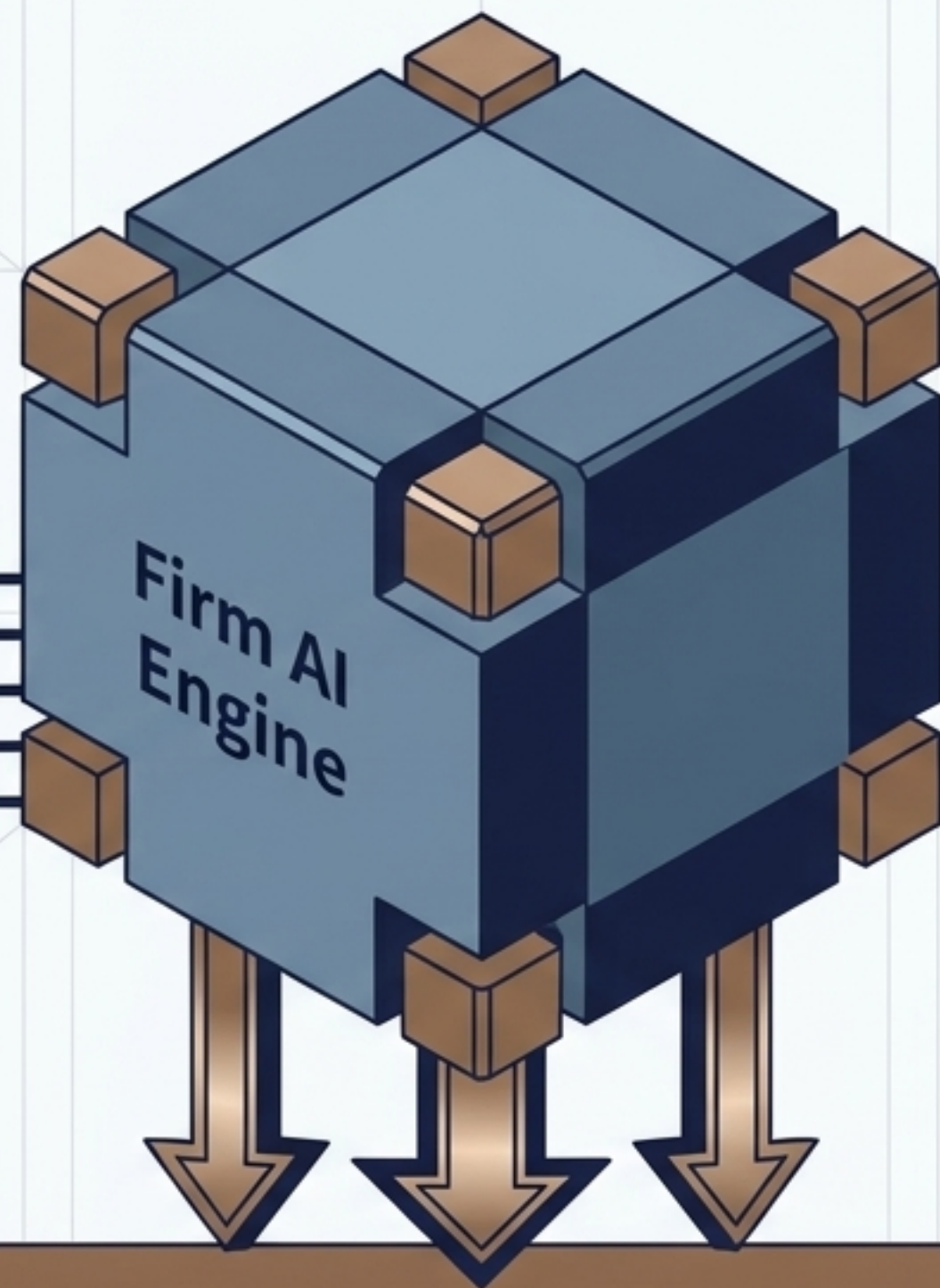
**独自の圧倒的専門性 × 極めて高いレベルのAI活用 = 企業の不可欠なパートナー**

# 事務所独自の「AI資産」構築： 暗黙知のアーキテクチャ

言語化・構造化：ベテランの思考プロセス、引用文献の読み方、比較論理を平易な言葉に分解した「プロンプト資産」。

RAG活用：過去の自社案件、独自のノウハウ、品質チェックリストのデータベース化。

バージョン管理：GitHub等を用いたプロンプトの継続的ブラッシュアップと組織的蓄積。

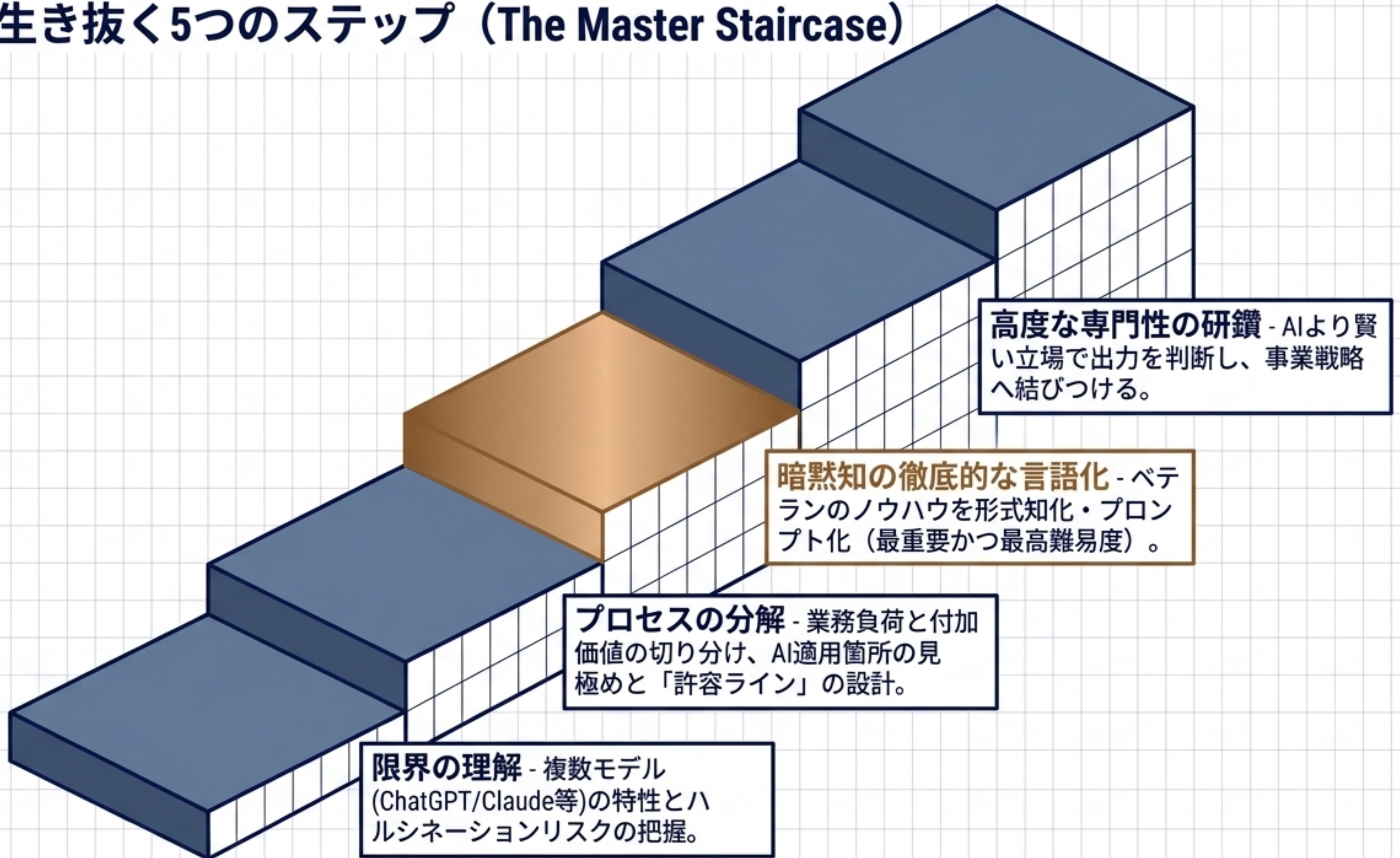


書類作成時間：平均20%削減

コンサルティング時間の純増

結果：顧客満足度向上と新規獲得

# AI時代を生き抜く5つのステップ (The Master Staircase)



# 堅牢なオペレーションの担保： 日本弁理士会ガイドライン（2025年5月）



## 同意・機密性

新規性情報の保護。機密情報を生成AIに入力する際の、クライアントからの明確な同意取得プロセス。



## 真偽・ハルシネーション

弁理士による検証。AIが生成した情報・引用文献の真偽に対する、人間による厳格な最終確認。



## 責任・専門性

補助ツールとしての位置づけ。法的見解の提供と専門的判断は、AIではなく弁理士自身が100%の責任を持って担当する。

このガイドラインの厳格な遵守明示が、逆説的に「顧客への最大の安心感」となり、コンサルティングへの集中を可能にする。

# 「存在の消滅」ではない。 「役割の質的転換」である。

AIが「80点の成果」を瞬時に生み出す時代、  
特許事務所が生き残る道は一つ。  
企業以上にAIを使いこなし、  
長年培った暗黙知をシステムに組み込むこと。  
そして、AIには到達できない「クオリティの上限」と  
「責任を伴う戦略的判断」を、  
圧倒的なスピードで提供し続けること。

これこそが、AI時代の  
弁理士の本質的価値となる。